

「エジプト古代末期社会の終焉とイスラーム文化の形成

ー赤色光沢土器を中心とする生活雑器と空間構成の移相ー

長谷川 奏

本論は、古代オリエント世界を代表する神権社会の「知」が地中海世界の知に置き換わり、理論知(テオリア)とく実践知(プラクシス)の双方の領域で大きな蓄積がなされ、それがやがてイスラームに受け継がれて創造的な文化が形成されるまでの流れを見通した上で、エジプトを事例に生活文化の領域の中からその変貌の画期を把握する試みである。こうした視点の研究は科学史や哲学史の領域の中で主に行われてきたが、生活知を物質文化研究で捉える考察は大きく遅れてきた。本論が長い年代を対象とするのは、変化しにくいとされる生活文化の形の変化を対象とするからである。生活文化の変化の画期は、政治的支配の形の変わり目や、それに伴う行政言語の変わり目とは必ずしも連動せず、変質を迫る根元の要素はゆっくりと時間をかけて浸透し、やがてあたかも大木が朽ちて倒れるように変化が明瞭な形で現れて、新たな文明の登場に繋がっていく。本論は、そうしたエジプトにおける生活文化の画期を、生活雑器をとりまく世界から解明することを課題にしている。

そこで本論では、生活雑器の中でも特に赤色光沢土器が果たした役割に着目しながら、物質文化の変遷と社会の変質を分析していくものである。赤色光沢土器はエジプトでは古来より用いられてきたが、本論で扱うものはギリシア世界の精神風土や技法伝統に依拠するものであり、ヘレニズム時代を通じてローマ世界に受け継がれ、ビザンツ時代まで継続して用いられていった。赤色光沢土器は、ヨーロッパ地域からインド地域に至るまでの広範な分布を誇る輸出品となり、器形・技法・装飾をめぐる情報は広大な環地中海圏で共有された。その一方で、その生産センターはイタリア半島からさまざまな属州地域に移行していくために、赤色光沢土器は往時の経済圏の推移を写し出す鏡ともなる。さらに古代末期からイスラーム世界に移行する中で、この赤色光沢土器は独自の発展を遂げ、最初期の施釉陶器の登場と深く結び付く雑器となった。その意味では、本研究対象は、イスラーム世界の技術革新とも接点を有する稀有な研究対象でもある。本論はそのような観点から、以下の構成で論を進めた。

第I章では、対象とするエジプトの古代末期～初期イスラーム時代とはどのような歴史を担った時代であったのかを概観した。初期文明という大きな前身伝統の世界に対して、地中海世界はどのように入り込み、個性的な文化を発展させ、さらにイスラームの支配によって、蓄積された文明ががどのように形を変えるか、その概要を把握することを課題とした。具体的には、前7世紀頃のいわゆる末期王朝時代から前4世紀後半以後のヘレニズム時代の胎動の時代を、環地中海圏の思想や生活文化がオリエント世界に根付き始めてい

く古代世界の「移相の時期」として位置づけ、中心的な考察対象となるローマ～ビザンツ帝国の支配期を経て、イスラーム文化が開花する 10 世紀頃までの歴史的な経緯を把握した。

第Ⅱ章では、古代末期～初期イスラーム時代を代表する三遺跡である、マルカタ南神殿周域住居址（後 1～3 世紀末）、マルカタ南神殿井戸址（5～7 世紀半ば）、フスタート遺跡（7 世紀半ば～10 世紀までを対象とする）の三遺跡における土器アSEMBリッジを概観すると共に、その中の赤色光沢土器の位置づけを把握した（マルカタ南遺跡は上エジプトの遺跡である）。上記三遺跡の存続年代は、古代からの伝統である多神教世界が残存する時代、キリスト教の時代、イスラームが根付いていく時代にはほぼ対応する。古代末期の始まりの段階では、生活雑器のセットが金属器・土器・ファイアンス器・ガラス器等から成り立っていたのが、初期イスラーム時代には、金属器・土器・（イスラーム）陶器・（中国）陶磁器・ガラス器に大きく変貌している姿が明らかに読み取られる一方で、当該の時代を通して土器は変わらず生活雑器の中で重要な位置を占めていたことが分る。さらにその土器の中でも、王朝時代からの伝統であるシルト土器とマール土器に加え、地中海地域から搬入された土器と、この外来系土器に大きな影響を受けて開発された国内生産の赤色光沢土器という 4 種が基本構成をなし、当該時期の物質文化の変遷を紐解く鍵となることが理解された。

第Ⅲ章では、古代末期における赤色光沢土器の研究史を振り返りながら、第Ⅱ章の資料だけでは把握できないいくつかの主要な土器群の様相を、博物館（アレクサンドリア博物館、コプト博物館、ベナキ博物館）の所蔵品の観察で補いつつ、その中でも特に環地中海圏という広域世界の動向を反映する赤色光沢土器と、地域的な特色を把握し易いマール土器に焦点を当てて観察を行った。赤色光沢土器の系譜は、型装飾イオニア土器 (Ionian Mould Ware) から窺われるように、ヘレニズム的な技術伝統の流れの中に位置づけられる。政治的な中心がヘレニズム王国からローマ帝国に移行した後でも、赤色光沢土器が生活雑器の中で占める役割や交易品としての品質の高さは保持され、いっそう高められていった。帝政初期（1～2 世紀）のテッラ・シギラータ土器 (Terra Sigillata Ware) には、イタリア製品 (Arezzo Ware) に加えて、キプロス～小アジア～パレスティナ等で生産された赤色光沢土器も含まれるが、これらはいずれも薄手で高い技術で光沢を作り出していた。2 世紀頃からイタリア半島を経済的に凌駕していく北アフリカ属州で生産された赤色光沢土器 (African Red Slip Ware/ ARSW) は、やがて徐々にその分布域を広げていくが、多神教世界からキリスト教世界への移行期に位置づけられる資料（方形皿）は、当該の時期がまた赤色光沢土器の成形技法と装飾技法の転換期でもあったことを示している。これは、型押し技法による神話的世界や帝国イメージの創造が多神教世界と深く関わっており、それが消えて、キリスト教世界が形成されたことと関連づけられるであろう。この時期を過ぎてビザンツ時代の赤色光沢土器は器形、装飾の双方において、前代よりは比較的簡素な技法に依拠しながらも量産化の道を歩み、5～7 世紀の環地中海圏の工房を大いに刺激した。

ヘレニズム時代の終わり頃に既に独自の赤色光沢土器(Egyptian Red Slip Ware/ EWSW)を生みだしていたエジプトでは、こうした環地中海圏の動向を受けて、ARSW を範型とする赤色光沢土器の生産を活発化させていった。EWSW の主流は赤色スリップの群であったが、アスワーン工房はヌビア地域との境域地帯に置かれていたため、赤色スリップに加え白色スリップの群を作り、個性的な地域生産の面も見せ始めていったことが窺われた。ARSW に特徴的な環地中海的な水壺がマルクレイによって作られている事例は、2～3 世紀という早期の時代に、マール土器が地中海圏の動向に参画していたことを窺わせ、その系統をひく水壺は、ビザンツ期からイスラーム時代にかけて、シルトクレイによる生産にスイッチされて、エジプトの生活文化を象徴する代表的な生活雑器のセットを構成するようになる。パレスティナ起源と思われるアンフォラは、デルタを中心に各地でマルクレイを用いて生産されていたようであり、コンスタンティノープルを中心とした強力な市場と深く関わることによって、広い分布を誇っていった。ビザンツ時代には、環地中海圏の経済活動が活発化したが、巡礼という宗教上の要因も、地域の経済活動を大いに刺激したと思われる。聖メナス巡礼はその代表的事例であり、在地の陶土(マルクレイ)を用いて作られた巡礼壺は、当該地域のワイン生産と深く結びついたアンフォラや大型水壺と同様に、地域経済圏を象徴する生産品となった。このように、赤色光沢土器とマール土器をめぐる生産～消費の動向から、古代末期世界の特質が漠然とではありながらも浮かび上がってくる。

第IV章では、エジプト古代末期においては、生活雑器に関わるどのような個性的な生活空間が存在したか、またそれが生活雑器の生産～流通～消費とどのように結びついていたかを、西方デルタ、メンフィス、テーベの三か所の事例から探った。これらの地域は、初期文明の時代には行政や祭儀の一大拠点となっていた大都市であったために、そこに強く残されていた古代的な伝統から地中海的な世界を受け入れて変質していく空間構成を分析対象としたのである。古代末期に固有な空間と生活雑器の生産～流通～消費に関わる諸側面の関わりを検討したところ、以下の所見が得られた。

① <生産>に関わる面では、メンフィスの中央を占めるプタハ神殿周域に設けられたファイアンス窯のあり方は、多神教時代における生産活動の姿を象徴していると思われた。当該の時代には、都市で生産を行う陶工は、施設を富裕者層から借り受けて生産活動を行ったと推測されるが、社会の中のパトロネージとは別に、工人たちの生産活動は、神々に護られた空間にも支配されていた。そうした多神教の神殿との関わりは 4 世紀以後のキリスト教世界の形成によってひとたび消滅したと思われるが、新たに砂漠の縁に形成されていたキリスト教修道院では、繊維製品や革製品のみならず土器の生産も行われた。それらの一部は、修道者を内対象とした内部ネットワークのみではなく、外部の一般の市場や都市で生きた人々の暮らしにも深く関わったと考えられ、そこにキリスト教施設をも巻き込んだ古代末期の物流ネットワークの特質が現れていると考えられる。

② <流通>の場において、最も顕著な傾向の一つは、西方デルタで見られた。王朝時代末

期には、この地にギリシア人の植民都市が作られ、地中海沿岸とメンフィスを取り結ばれた水系が流通の基幹軸を形成したために、このルートを中心に環地中海圏のヒトとモノが運ばれていった。ただしこの流通網は、後発のヘレニズム政権に篡奪されて、アレクサンドリアとメンフィスを連結する軸が新たに形成され、メンフィス以南はナイルから砂漠の隊商路を通り紅海・インド洋に繋がり、広域経済ネットワークの軸ともなった。その点で、カノプス～ナウクラティスとシェディアの事例は、環地中海圏という広域経済圏の流通事情が、遺跡から出土する生活雑器に如実に反映される稀有な事例であった。一方、さまざまな地域で、エジプト固有の多神教時代のネットワークがキリスト教のネットワークに受け継がれていく地域的な側面も垣間見られた。マリユート河畔では、湖をわたってオシリス参詣に向かうヒトとモノの流れがキリスト教時代に受け継がれ、キリスト教巡礼の際には、港湾施設はいつそう拡充され、地場産業であるワイン生産と在地のマルクレイを用いた窯業はこうした流通の局面と深く関わった。メンフィスはアレクサンドリアに次ぐ規模の都市であり、ナイルや運河をわたる南北軸の水系が交通・運輸を担っていたが、西方の墓地はまた葬送産業に関わる大きな消費地を形成しており、ファラオの時代からギリシア世界に受け継がれたと思われる死生観をベースにして、都市と墓地を結ぶ東西方向の水辺の移動軸が稼働して、ヒトとモノが行き交った。

③ <消費>に関わる局面において、多神教世界からキリスト教時代への移行期は、長く存続した伝統が廃絶される側面を見せた。テーベの事例では、ファラオ時代からの伝統を持つ祭儀に関わる生活雑器のセット（ミニチュア土器、アンフォリコス、水壺、器台等）は、多神教世界の崩壊と共に消滅していったようであり、これに代わって新たなキリスト教世界に根付いた雑器（水壺～深鉢～甕という貯蔵器）がコプトの美術要素を持つ装飾で覆われていった展開が考えられる。それはまた、ファラオ時代からの伝統が地中海的な雑器のセットへと移行した転換期でもあったと思われる。特にフィルター付の水壺は、両者の接点として、変化を象徴する器となった。キリスト教時代のジェーメーの事例では、この町に住む人々の生活規範にもキリスト教精神が深く浸透しており、砂漠縁辺の修道院と都市は密接な交渉があったと推測され、生活雑器の消費ネットワークにおいても、テーベ西岸の都市域と砂漠域が深く関わっていた可能性がみてとられた。その一方で、ローマ～ビザンツ帝国時代を通じて、宗教の変遷に関わりなく、食卓器から調理器、貯蔵器に至るまで、環地中海圏に共通する生活様式は継続性をもって保たれていた点も見逃すことができず、これは往時の生活文化の背後に、絶えず両帝国の社会システムをベースとする物流構造があったからであると思われる。

第V章では、赤色光沢土器とその周囲の土器群からなる生活雑器と古代末期の空間がイスラームの支配後に、どのように変質するかを主にフスタート出土の資料から分析した。

赤色光沢土器（ERSW あるいはアスワーン土器と呼ぶ）は、初期イスラーム時代にまで存続していくが、それはミクロにみれば、いくつかの段階を経ている。都市発展の第I期の

前半（650～750年）は、フスタートの創建と、それに続く初期段階の都市建設の時代であり、国際商業ネットワークも、ヒジャーズやダマスカスと深く結びついていた時代である。赤色光沢土器のうち、ビザンツ時代からの系譜上で把握される群は、コプト彩文に彩られた水壺～深鉢～甕と共にこの時代には存続していた。変化の兆しが現れるのは次の第Ⅰ期の後半（750～900）であり、赤色光沢土器にヌビア系の彩文土器のカップなどが登場する時期である。最初期の施釉陶器（鉛釉陶器）は赤色光沢土器の内部から開発されていったものとみられ、この時期に登場したと考えられる。このような新たな開発が8世紀後半に起こっていたとしても資料の上で矛盾はないと思われる。9世紀に入ると、初期の鉛釉陶器は、多彩釉陶器、白釉陶器、初期のラスター陶器などとともに、生活雑器のセット関係の中に入り込んでいったと思われる。また9世紀後半になると、メソポタミア地域との往来が盛んになり、中国からの影響を強く受けた陶器もエジプトに齎されるので、この時代は生活雑器の世界は新たな世界への胎動していく時期として位置づけられるであろう。第Ⅱ期（900～1000/1100）には、赤色光沢土器から環地中海的な特徴は消滅し、アスワーン工房で作られた土器群には、古典期キリスト教ヌビアの影響が強く現れる。この時期を代表するファーティマ朝の時代においては、素焼きの土器の中でも特にマールクレイの水壺では繊細な装飾を有する革新が進行し、鉛釉陶器はマンガン等を利用する次段階のステップに移行する。さらに高い完成度を持つラスター彩陶器、錫を用いた白釉陶器や青釉陶器が登場し、南北朝時代から宋の時代にかけての白磁や青磁が多量に齎される等、生活雑器をめぐる世界は一大変貌を遂げていった。

このように、赤色光沢土器の利用という環地中海世界の伝統は、ヘレニズム時代から古代末期を通して、イスラームの前身伝統を形成したが、これはビザンツ帝国という支配システムが消滅した後の初期イスラーム時代にも廃絶されることなく存続した。その一方で、アスワーンという異域とのはざまに置かれた境域工房は、前身の物流構造が存続する間にも、新たな消費集団＝イスラーム化していくエジプトおよびキリスト教化したヌビアの人々に対応する嗜好の変化に、敏感に対応していったことが推測される。またそうした異域との接触を経験した時代のどこかで、鉛釉陶器の技法が開発され、広く受け入れられていった可能性が高い。

最終のまとめでは、Ⅲ章～Ⅴ章で得られた分析成果を、1)村落考古学からの視点、2)イスラーム文化形成論、3)エジプト文明論との関係、の3点から総合化を行った。

1) エジプト社会の複雑化と古代末期社会論からの視点

社会考古学の視点から課題となるのは、オリエントの古代国家とはまた性格が異なる複雑さをみせた〈帝国〉（ローマ帝国、ビザンツ帝国、イスラーム帝国等）の社会システムの特徴を考えて行くことにあるであろう。古代末期に登場した〈帝国〉では、政権はさまざま民族が居住する広範な地域の物流を管理し、税金によって集められた莫大な金銭を再分配した。高品質な大量生産を維持するために、専門分化した膨大な数の人々がこれに携

わった。熟練した職人がモノを生産し、輸送に関わる洗練されたネットワークが存在し、商品を貨幣で購入する消費者からなる巨大な市場があった。〈帝国〉は大きな繁栄を見せた一方で、社会が変質に向うねりは、宗教動向の中にも現われ、〈帝国〉の精神世界は大きく揺さぶられた。また民族移動等によって国家がひとたび崩壊すると、消費者は極めて脆弱な立場に置かれた。古代末期社会とは、こうした社会の複雑さの持つ光と影が、最も顕著に作用した時代として位置づけられよう。エジプトは既にビザンツの社会システムに深く関わっていたために、西側の〈帝国〉が消滅した5世紀の変質の影響は少なかったが、こんどはイスラームの支配による東の〈帝国〉の消滅を経験し大きな変動が訪れた。

2) イスラーム文化形成論からの視点

赤色光沢土器から最初期の鉛釉陶器の開発がなされた点をイスラームの技術革新として考察した。本論では、最初期のイスラーム陶器の開発は、赤色光沢土器にヌビア的な要素がみられる直後に進行していったという仮説が得られたが、学史の中でムスリムの開発を齎したとする「知的エネルギーとアラビア語の活力」をベースとするイスラームと周辺文明との出会いの中には、今後はアフリカ的な文化との接触も含めて考えていく必要があると思われる。バグダードで行われた大翻訳活動を通して取り入れられていったギリシア科学の遺産が、いわゆる「12世紀ルネサンス」を通して西欧に伝達されていった歴史までを見通した場合、このような窯業史の中の一大革新は、〈イスラームの技術革新〉の一端を担っていったとも位置づけられるが、国家プロジェクト的な規模で展開した知の包摂とは異なり、生窯業分野の開発は、あくまでも「生活の知」として展開した。

3) エジプト文明論からの視点

赤色光沢土器を中心とする生活世界が、初期文明の生活スタイルに代わる伝統世界を作り上げ、それが政治や宗教による断絶を乗り越えて存続していく現象に対し、地理学で議論されている「エジプト的性格」論との接点を考察した。たとえばメンフィス（あるいはカイロ）という首都圏の集中性は、政治権力に留まらず、〈物流の核〉がそこにあったからであるという見通しを与えてくれる。またひとたびエジプトに入り込んだ外来的要素が、内部からの力によって「溶かし吸収されていく」特質は、本論で扱った神々の習合（シンクレティズム）や外来の人々が村落の中で通婚どを経て同質化していく過程と深く関わると思われる。そしてなにより、環地中海的な生活雑器のセットが、政治的支配や宗教の形に拘らず継続していく背景にも、エジプトの〈地理的特質〉が関わり、ファラオの時代から営々と続くムラの生産システム（灌漑）と生活雑器の物流システムが混在一体化していた状況を想起させ、それがエジプトの物質文化の独自性を作り上げたとも思われるのである。